

研究会企画パネル

「幼児期のことばの獲得を支援する」

子どもの日本語教育研究会の毎年1回の大会では、関連領域の研究と教育現場との橋渡し、有機的往還を形成することを目的として、パネルセッションや講演などの企画プログラムを実施しています。

今回は「幼児期のことばの獲得を支援する」をテーマに設定しました。子どものことばの発達の基礎は幼児期にあります。多様な言語文化背景をもつ子どもたちがことばを獲得し、その後の認知的な発達のしっかりとした基礎を培うためには、幼児期にどのような支援を行えばよいのでしょうか。この問いに答えるための模索はまだ始まったばかりです。

本パネルでは、幼児期のことばの獲得の支援のあり方を考えるため、保育園、幼稚園などの就学前教育と家庭教育の二つの領域で実際に教育や支援を行っておられる実践者に報告をお願いしました。また発達心理学を専門とする研究者に理論的な側面からそれぞれの実践を意味付けてもらいます。

その後、フロアのみなさんにも加わっていただき、全体で幼児期のことばの獲得の支援のあり方を議論したいと思います。

コーディネータ 浜田麻里（京都教育大学）

◆保育園・幼稚園において「ことばの獲得」を支援する

高木 都奈子（愛知学泉短期大学非常勤講師・前知立市教育委員会）

◆家庭で「ことばの獲得」環境をつくる

マ・ティン・ティン・ウー（ビルマ語医療通訳者）

◆複言語環境下にある幼児の「ことばの獲得」とその環境

内田 千春（東洋大学）

大会企画パネル「幼児期のことばの獲得を支援する」

保育園・幼稚園において「ことばの獲得」を支援する

高木 都奈子（愛知学泉短期大学非常勤講師・前知立市教育委員会）

1. 日常生活の中で言葉の確認が必要である

【集会で】「上靴」：生活の中で左右を獲得させるため上靴を脱いだら自分の左横に置くように指導した。上靴の実物を見せず、言葉だけで「自分の左に置く」という指示を出した際、外国籍児が周囲を見始めた。日本籍児は指示を理解できていた。外国籍児は毎日使用している上靴という名詞がわかっていなかった。

【課題】保育者が言葉の理解を時々確認する意識が必要ではないか。

2. 生活の中で使われない言葉を保育者の意識的援助で知る

【昼寝の場面で】「天井」：「扇風機についている場所をなんていうかわかるかなあ〜」と問いかけると、外国籍の子どもも日本の子どもたちもわからなかった。「天井」という言葉を使う生活が減ってきていることを感じた。

【課題】家庭生活において普段聞きなれない言葉は保育現場で意識的に保育士が言葉を使うことにより、日本国籍児、外国籍児ともに子どもの語彙数を増やす機会になる。

3. ものの名前、用途を知る

【集会で】「ランドセル」：正月明けに子どもたちにランドセルを購入してもらったかどうか聞いたとき、日本国籍児は正月に祖父母に購入してもらったと話し、外国籍児は反応がなかった。「もしかしたらランドセルがわからないのかも？」と思い視覚優位の働きかけを行った。併せて「筆入れ」「下敷き」の名前、用途も知らせた。

【課題】用途は知っていても名詞や動作の言葉を知らない外国籍の子どもたちが多く、知っているという前提で保育を進めるのではなく、保育者や友だちとの会話が広がるよう子どもの姿に応じた問いかけや助言等が重要である。

4. ひらがなを書くことを保護者と楽しむ

【保育室で】ことば遊びを文字に繋げる：就学に向け年長児と言葉遊びを文字を書く遊びに発展させた。家庭で保護者の方と言葉遊びをし、出てきた言葉を書いて持ってきてもらった。

【課題】外国籍児には日本語の文字に触れる環境は集団保育の場のみ。園の役割が重要。

5. まとめ

意識的に日本語を使い保育の中に言葉遊びを取り入れることで語彙数が増えていく。保育者は外国籍の子どもたちの就学時の現状を把握し、人的環境として日頃より子どもの興味関心のある遊びの環境を整え、寄り添い丁寧に関わることが重要である。

大会企画パネル「幼児期のことばの獲得を支援する」

家庭で「ことばの獲得」環境をつくる

マ・ティン・ティン・ウー（ビルマ語医療通訳者）

私は、留学生として来日し16年になります。2009年には難民認定を受け、現在は高田馬場にある「さくらクリニック」で医療通訳者として勤務しています¹⁾。現在、幼稚園の年長組に通う娘がいますが、その娘にミャンマーの言語や文化をどのように伝えているのかをお話しします。お話しする内容の一部になりますが、以前インタビューを受けた時の記録をご紹介します。

.....

娘にビルマ語やミャンマーの歴史を学ぶ環境を創る

娘には、3歳まではビルマ語を教えていましたが、嫌がるようになったのでやめました。今は、私がビルマ語で話しかける簡単なことばは聞いてわかりますが、話すのは、ミンガラバー（こんにちは）、ネィカウンラー（元気？）、チェズティンバーデー（ありがとう）、タメンサピラ（ごはん、食べましたか？）などの簡単な挨拶ぐらいです。

でも、私がビルマ語で通訳をしていることには関心を持っているようです。ビルマ語で医療相談に応じていると「何て言っているの？」と尋ねてきたりします。また、私が、道で座り込んでいるミャンマーの方にビルマ語で話しかけ、日本語で病院に連絡して助けたときには、「ママがビルマ語で話しして、通訳してあげないと困るんだね」と理解してくれています。

最近、また少し関心を持つようになってきたので、ビルマ語の文字を教え始めています。簡単な挨拶のことばを教えたり、寝る前にビルマ語の本の読み聞かせをしたりしています。日本語の本を読むことも多いのですが、その後は、ビルマ語でやりとりをします。いつか、娘が興味をもち、その気になったときに手に取れるようにと、ビルマ語の本を本棚に並べてあります。いつ、娘がそんな気持ちになるかはわかりませんが、環境を創っておきたいのです。

仏教の教えの大切さとお祈りのことば

ミャンマーの文化は仏教と深い関わりがあります。中板橋に、ミャンマーの人が集う仏教寺院があります。そこで、お花祭りや水かけ祭りが行われるのですが、私も娘も必ず参加しています。東京近辺に暮らすミャンマーの人々が集い、祝い、祈ります。そこで、日本で暮らす私たちは絆をつくり、仏教の教えである感謝の気持ちや親を敬う考え方・振る舞いを維持しているのかもしれませんが。娘も毎週寺院に通って祈っていますし、寝る前には、必ずお祈りを捧げています。いまでは、諳んじられるようになりました。

（インタビュアー：齋藤ひろみ・東京学芸大学）²⁾

.....

- 1) マ テン テン ウー（2017）「医療現場の多言語化を担う一医療通訳という仕事」川村千鶴子編『いのちに国境はない 多文化「共創」の実践者たち』明石書店
- 2) 齋藤ひろみ「外国人の子どもたちの言語・文化の継承」石井正己編『教科書と昔話』三弥井書店（印刷中）

大会企画パネル「幼児期のことばの獲得を支援する」

複言語環境下にある幼児の「ことばの獲得」とその環境

内田 千春（東洋大学）

1. 乳幼児期の言語・認知発達の特徴について

脳神経発達の研究成果から一般的に乳幼児期には、言語、情動統制に関する脳の感受性がまず高くなり、その後数的認知や社会的スキルに関する感受性が高くなることがわかっている。その後言語に関する感受性がなくなるわけではなく幼児期を通して言葉は育っていく。ことばの育ちは認知的発達によっておきるものであると同時に、ことばは認知発達のツールでもある。ことばは社会性の発達にも支えられており、親子のことばのやり取りが、子どもに応答的で豊かであるとことばの発達は促進されると同時に、ことばは親子がかかわる大切なツールでもある。

生活経験が豊かであるとは、探索的・能動的に周りの環境に働きかけたり、周りの人からの働きかけを受け入れたりする機会が豊かだということである。乳幼児期は身近な他者との基本的信頼感が育まれ、自尊感情や有能感の基盤ができる時期である。生まれたときには持っていたはずの、やれる、やりたいという気持ちが失われないように、また子どもたちの持っているその子らしさや興味・好奇心が損なわれないような育ちを大事にしたい。パネリストの実践側のお話から、こうした育ちを大切にされてきたことがわかる。

さらに複言語発達を考える時、第1に言語発達の基盤として母語経験が豊かだと、日本語その他の2つめ、3つめの言語発達につながることも知られている。第2に、母語はアイデンティティの基盤としても重要である。思春期以降の親子のつながりのため、また青年期以降の発達を支えるアイデンティティにかかわる錨（アンカー）のような意味がある。

2. 家庭・保護者の役割を尊重する支援

実はイギリスなどの成人期までを追いかけた縦断研究では、就学前教育や学校以上に家庭の影響が強く見られた。家庭や親子関係が子どもの発達に果たしている役割を支援者が理解し、園や学校が担えない部分があることを保護者と共有するのも保護者支援の一環である。その時、特別なことをしなければならぬのではなく、親から愛されその存在を無条件に大切にされていると子どもが感じられることが大事であり、その信頼関係を基に子どもは他者との関係を築いていく。親子の関係づくりこそが支援の目的として重要になることも多い。

3. 園・保育者の役割をより自覚的に捉える必要

家庭環境は重要であるが、就学前の子どもが育つ家庭外の間も重要である。社会経済的に不利な背景を持つ子どもほど、就学前教育の質が明瞭に影響するとわかってきた。子どもにとっては園が唯一の日本語環境、場合によっては唯一の言語発達の基盤であるかもしれない。さらに、園は保護者にとって、「日本の学校」との初めての出会いかもしれない。「学校」と家庭の関係にも様々な文化によって異なる。異質な他者との出会いは、あたりまえになんともなく行っている保育の営みを再考する機会である。外国につながる子どものことばの発達を支える保育や家庭支援は、どの子どもにとっても望ましい質の高い保育につながっている。